

恋人を殺した男を毎晩抱いて壊していく——復讐のはずだったのに、離れられなくなった

第1話 再
会

2

第2話 検査
21

第3話 曝露
40

第4話 墮落
56

第5話 逆転
77

第1話 再会

格納庫の空気は、いつだって同じ匂いがする。

航空燃料と金属と、かすかな潤滑油。朔也はその匂いを胸いっぱい吸い込みながら、主翼の下で点検表に目を落とした。

「柏木さん、新しい人が来るって聞きました？」

後輩の声に、朔也は顔を上げた。入社二年目の西野だ。人懐っこい笑顔で、整備チームのムードメーカーを自認している。

「ああ、今日からだろ」

「ベテランらしいですよ。前の空港じゃエースだったとか」

「そうか」

興味なさげに答えて、朔也は視線を点検表に戻した。

誰が来ようと関係ない。自分はただ、目の前の仕事をこなすだけだ。三年前からずっと、そうやって生きてきた。

罪を抱えたまま。

誰にも気づかれないように。

昼休み、食堂で弁当を広げていると、周囲がざわついた。

「あれが新人？ でかいな」

「湊さんって言うらしい。32歳だって」

朔也は何気なく顔を上げた。

そして、凍りついた。

食堂の入り口に立つ男。日焼けした肌、無精ひげ、鋭い目つき。182センチはありそうな体躯が、周囲を威圧するように存在している。

知っている。

あの顔を、知っている。

三年前。事故の後、何度もニュースで見た。遺族として、カメラの前に立っていた男。死んだ操縦士の恋人として、静かに怒りを滲ませていた男。

胸の奥で、何かが軋んだ。

箸を持つ手が震える。

なぜ、ここに。

偶然か。それとも。

「柏木さん？ 顔色悪いですけど」

「なんでもない」

朔也は弁当を閉じ、席を立った。

逃げるように食堂を出る。背中に、視線を感じた。

振り返れなかった。

午後の作業は、地獄だった。

湊は同じチームに配属された。当然のように朔也の隣で作業し、当然のように話しかけてくる。

「柏木さん、でしたっけ。よろしくお願いします」

「ああ」

声が掠れた。

湊の目が、一瞬だけ細くなる。

「どこかでお会いしましたか？」

「いや」

「そうですか。なんとなく、見覚えがある気がして」

心臓を鷲掴みにされたような圧迫感。

知っているのか。それとも、探りを入れているのか。

朔也は黙々と作業を続けた。手が震えないように、必死で力を込めながら。

湊は何事もなかったように仕事をこなした。丁寧で、正確で、周囲からの評価は上々だった。

ただ、時折。

朔也を見る目だけが、違っていた。

獲物を見定める、肉食獣のような目。

深夜。

朔也は一人、格納庫に残っていた。

残業ではない。ただ、家に帰りたくなかった。一人になると、三年前のことを考えてしまう。

あの日の整備記録。自分が見落とした異常。

事故調査では「原因特定困難」と結論づけられた。複合的な要因が重なった、不幸な事故だと。

でも、朔也だけが知っている。

油圧システムのわずかな違和感。報告すべきだったのに、確信が持てなくて、そのまま流してしまった。

翌日、試験飛行中に機体は墜落した。

炎。

遺体。

テレビに映る、恋人を失った男の顔。

「こんな時間まで残ってるんですね」

声に、心臓が跳ねた。

振り返ると、湊が立っていた。作業着のまま、格納庫の入り口に。

「湊さんこそ」

「忘れ物を取りに来ただけです」

湊が近づいてくる。

一步、また一步。

朔也は後退した。背中が、機体の胴体にぶつかる。

「逃げるんですか」

「何の話だ」

「三年前の話ですよ」

空気が、凍った。

湊の目が、真っ直ぐに朔也を射抜く。

「お前が殺したんだろう」

息が、止まった。

「俺の恋人を。お前の整備ミスで」

「違う」

「違うない」

湊の手が、朔也の襟首を掴んだ。

「調べたんだ。三年かけて。当時の整備記録、お前の担当箇所、油圧系統の異常値。全部な」

朔也の足から、力が抜けた。

否定できない。

否定する資格がない。

「どうするつもりだ」

「さあな」

湊の唇が、歪んだ。

「まずは、点検だ」

「点検？」

「整備士なら慣れてるだろう。機体の隅々まで調べて、異常がないか確認する。お前にも同じことをしてやる」

意味がわからなかった。

いや、わかりたくなかった。

湊の手が、朔也の作業着のファスナーに触れた。

金属のジッパーが、静かな格納庫に響いた。

ジジジ、と引き下ろされる音。朔也は抵抗しようとして、できなかった。

罪悪感が、手足を縛る。

三年間、逃げ続けてきた。見て見ぬふりをしてきた。その報いを受ける時が来たのだと、どこかで思ってしまった。

「大人しいな」

湊が嗤う。

「抵抗しないのか」

「……」

「罪の自覚はあるってことか」

作業着が肩から落ちる。下に着ていたTシャツを、湊が乱暴に捲り上げた。

冷たい空気が、肌を刺す。

格納庫の夜は寒い。金属の床と壁が体温を奪い、鳥肌が立った。

「動くなよ」

湊がポケットから取り出したのは、整備用のLEDライトだった。

高輝度。機体の細部を照らすための、強力な光源。

「なに、を」

「点検だって言っただろ」

光が、朔也の胸に当てられた。

眩しさに目を細める。自分の身体が、無機質な光に曝される。

「傷はないな。打撲痕もなし」

湊の声は、まるで本当に点検しているかのように淡々としていた。

「次」

光が下に移動する。腹部、へそ、腰骨のライン。

「痩せてるな。飯、食ってないのか」

「関係ないだろ」

「罪悪感で食えなくなったか？」

凶星だった。

三年間、まともに食事が喉を通らない日が続いた。眠れない夜も多かった。

湊は答えを待たず、朔也のベルトに手をかけた。

「待て」

湊は答えなかった。ただ、バックルを外す手を止めない。

ボタンが弾かれ、ジッパーが下りる。

作業ズボンが膝まで落ちた。

朔也は咄嗟に股間を手で覆おうとした。だが、湊はその手首を掴み、横に払いのけた。

「隠すな」

「やめ——」

言葉は最後まで続かなかった。

ボクサーブリーフ一枚になった下半身に、容赦なくLEDライトが当てられる。

眩しすぎる光。まるで手術室のライトのように、隠したい部分を暴いていく。

「ここも点検だ」

湊の手が、布越しに股間に触れた。

「……っ」

声が漏れた。

反射的に身を振るが、背後には機体の胴体。逃げ場がない。

「反応してるな」

「してない」

「嘘つけ」

湊の手が、ゆっくりと布の上から形を確かめる。

恐怖と、緊張と、そして認めたくない熱が、下腹部に溜まっていく。

「やめ……」

「点検は最後までやる。それが整備士の基本だろ」

嘲笑うような声。

ボクサーブリーフの縁に指がかかった。

下着が引き下ろされた瞬間、朔也は目を閉じた。

見られたくない。

こんな姿を、誰にも見られたくない。

だが、LEDライトの光はまぶたの裏まで透過してくる。逃げ場がない。

「目を開けろ」

「……」

「自分の身体だろ。ちゃんと見ろ」

湊の手が顎を掴み、無理やり顔を上げさせる。

目を開けると、光の中に自分の下半身があった。

晒されている。

完全に。

羞恥で頭がおかしくなりそうだった。

顔が熱い。耳まで真っ赤になっているのがわかる。

「ここは正常か確認しないとな」

湊が屈み込み、顔を近づけてくる。

まさか、と思った瞬間。

手袋をした指が、性器に触れた。

「ひっ……」

冷たい。

ニトリル製の整備用手袋。普段、機体の点検に使うのと同じもの。

その冷たく滑らかな感触が、最も敏感な場所を撫でる。

「反応、悪いな」

「当たり前だ……こんな、状況で……」

「じゃあ、もっと丁寧に点検するか」

湊の手が、ゆっくりと動き始めた。

手袋越しの指が、竿の根元から先端へ。亀頭の周りを円を描くように。裏筋を爪で軽く引っ搔く。

「やめ……」

湊は答えず、手の動きを続けた。

朔也は機体に背中を押し付け、膝の震えを堪えた。

こんなの、おかしい。

憎まれている。当然だ。自分は、この男の恋人を殺したのだから。

なのに、なぜ。

「あ……っ」

身体が、反応し始めていた。

冷たい手袋の中で、性器が少しずつ硬さを増していく。

信じられなかった。

こんな状況で、こんな屈辱的なことをされて、なぜ勃起するのか。

「やっぱり反応してきたな」

湊の声に、嘲りが滲む。

「殺人犯のくせに、感じやすいんだな」

「殺人犯じゃ……」

「じゃあなんだ。過失致死か？ 業務上過失致死か？ どっちにしろ、人殺しには変わらないだろ」

言葉が、刃のように突き刺さる。

否定できない。

自分のせいで、人が死んだ。その事実は、何をどう言い繕っても変わらない。

涙が滲んだ。

罪悪感と羞恥と、得体の知れない快感が混ざり合って、頭がおかしくなりそうだった。

湊の手が、勃起した性器を完全に握り込む。

手袋がきゅ、と締まる。

朔也の腰が、びくりと跳ねた。

しごかれる。

ゆっくりと、焦らすように。

手袋の冷たさはすぐに体温で温まり、代わりに滑りが悪くなる。乾いた摩擦が、痛みと快感の境界を曖昧にしていく。

「あ……っ」

声が漏れる。

押さえきれない。格納庫に響く自分の喘ぎ声が、羞恥を煽る。

「声、出すな。警備員に聞こえるぞ」

「むり……っ」

「じゃあ、これで黙らせるか」

湊のもう片方の手が、朔也の口を塞いだ。

手袋越しの掌が、唇を押さえつける。潤滑油とゴムの匂いが鼻を突く。

「んっ……！」

呼吸が苦しい。

鼻だけで息をしながら、下半身は容赦なく弄られ続ける。

手袋の上から、先端が擦られる。亀頭の溝を指でなぞられ、尿道口を爪先で軽く押される。

「ん……っ」

腰が勝手に動く。

止められない。身体が、快感を求めて湊の手に擦りつけようとする。

「自分から腰振ってんのか」

耳元で囁かれ、全身が熱くなった。

違う。違う。そんなつもりじゃない。

でも身体は言うことを聞かない。

湊の手が速度を上げる。手袋が擦れる音が響く。

「んんーっ……！」

限界が近い。

下腹部がきゅうっと締まる感覚。射精が近づいている。

こんな形で、イカされるのか。

この男の手で。

恋人を殺した相手の目の前で。

「イきそうか」

湊が手を緩めた。

「……！」

寸止め。

あと少しだったのに。ぎりぎりで止められて、朔也の身体は宙ぶらりんのまま取り残される。

「まだだ」

「な……」

「まだ点検は終わってない」

口を塞いでいた手が離れる。

朔也は荒い息をつきながら、湊を見上げた。

冷たい目。

憎しみと、何か別のものが混じった目。

「次はこっちだ」

湊の手が、朔也の身体を反転させた。

機体の胴体に、手をつかされる。

冷たい金属の感触。まるで逮捕される犯罪者のような姿勢。

「これ以上は——」

「限界なんてない。お前が決めることじゃない」

背後で、湊が屈み込む気配がした。

何をする気だ。

「整備士なら知ってるだろ。点検は表だけじゃ不十分だ」

手袋をした指が、尻の谷間に触れた。

「こっちもチェックしないとな」

朔也は初めて、本気で抵抗した。

腰を捻り、逃げようとする。だが、湊の力は圧倒的だった。

片手で腰を固定され、もう片方の手が容赦なく臀部を広げる。

「いい尻してるな。締まってる」

「見るな……」

「見る。見て、触って、確かめる。それが点検だ」

LEDライトが、後ろから当てられた。

光が、最も隠したい場所を照らす。

羞恥で死にそうだった。

誰にも見せたことのない場所。自分でも直視したことのない場所。それが、煌々と照らし出されている。

「綺麗だな。使われたことないのか」

「当たり前だ」

「処女か」

指が、穴の周りを撫でる。

ぴくり、と筋肉が反射的に収縮した。

「敏感だな」

「触るな」

湊は答えず、指の動きを続けた。中には入れず、ただ入口を刺激する。

「ひ……っ」

変な声が出た。

知らない感覚だった。前を触られるのとは違う、もっと奥に響くような、奇妙な快感。

「反応してる」

「してない」

「嘘つけ。ここ、ひくひく動いてるぞ」

指が軽く押し込まれる。が、中には入らない。入口をこじ開けようとする圧力だけが伝わる。

「入れるな……！」

「今日は入れない」

湊の声が、耳元で囁かれる。

「今日は、な」

つまり、次がある。

まだ終わりじゃない。

絶望が、脊髄を這い上がった。

再び、前に手が伸びる。

萎えかけていた性器が、すぐにまた硬くなる。

「身体は正直だな」

「違う」

「何が違う。勃起してるのは事実だろ」

後ろから抱え込まれるような体勢で、前を扱かれる。

湊の体温が背中に伝わる。大きな身体に包まれ、逃げ場がない。

「お前が俺から何を奪ったか、わかってるか」

耳元で、低い声。

「恋人だ。五年付き合った、結婚するはずだった相手だ」

手が、きつく握られる。

「聡っていう名前だった。パイロットになるのが夢で、試験飛行の日を子供みたいに楽しみにしてた。あの日の朝、『今日が終わったら祝杯あげよう』って、俺に言ったんだ」

声が、わずかに震えた。

「お前のせいで、俺は一人になった」

何を言っているのかわからなかった。

でも、声の中に滲む痛みだけは、わかった。

自分が壊したものの大きさを、初めて実感した。

「ごめん」

気がつくのと、呟いていた。

「ごめん、ごめんなさい」

「謝って済むなら、警察はいらないんだよ」

手が速度を上げる。

荒々しく、容赦なく、射精へと追い込んでいく。

「あっ……あ……っ……！」

声を抑える余裕もなかった。

背筋が反る。腰が震える。全身が、快感に支配される。

「イけ」

命令。

「イって、自分の惨めさを思い知れ」

「あ……っ……！」

朔也の身体が、びくびくと痙攣した。

精液が、格納庫の床に飛び散る。白濁した液体が、冷たい金属の上に点々と落ちる。

長い射精だった。

溜まっていたものを全部吐き出すように、何度も何度も白い液が噴き出す。

終わった後、朔也は機体にもたれかかったまま動けなかった。

背後で、湊が手袋を外す音がした。

「これで終わりだと思うなよ」

湊の声が、背中に落ちる。

「今日はまだ表面点検だ。次はもっと深く調べる」

「……」

「毎日、思い知らせてやる。お前が何をしたか。お前がどんな人間か」

足音が遠ざかる。

格納庫の扉が開き、閉じる音。

一人になって、朔也はその場にへたり込んだ。

床が冷たい。

自分の精液の上に座り込んでいることに気づいて、吐き気がした。

でも、動けない。

涙が、頬を伝った。

三年間、逃げ続けてきた罪が、ついに追いついてきた。

三年前の九月十七日。

聡という名前の人間が死んだ日。

自分が殺した日。

これからどうなるのか。

わからない。

ただ一つわかるのは、明日からが本当の地獄だということだけだった。

第2話 検査

翌朝、朔也は出勤するかどうか迷った。

逃げれば楽になれる。この空港を辞めて、どこか遠くへ行けばいい。

でも、それは罪を認めることになる。

三年間守り続けてきた嘘が、崩れることになる。

「行くしかない」

鏡の中の自分は、ひどい顔をしていた。目の下に隈ができ、肌は青白い。一睡もできなかった。

昨夜のことが、何度も頭を過る。

手袋の冷たさ。LEDライトの眩しさ。そして、自分の身体が裏切った瞬間。

吐き気がした。

でも、逃げるわけにはいかない。

格納庫に入ると、すでに湊がいた。

他の整備士たちと談笑している。昨夜のことなど何もなかったかのように、穏やかな表情で。

「おはようございます、柏木さん」

湊が振り返り、にこやかに挨拶した。

「おはよう」

声が掠れた。

周囲の目がある。普通に振る舞わなければ。

「今日はB滑走路の点検ですね。一緒に回りましょう」

「ああ」

断る理由がない。

湊の隣を歩きながら、朔也は背中に冷や汗が流れるのを感じた。

日中は、何事もなく過ぎた。

湊は完璧な新人を演じていた。丁寧で、正確で、協調性がある。上司からの評価も高く、同僚たちも彼を歓迎していた。

「湊さん、飲み会どうですか？ 今度の金曜」

「ありがとうございます。ぜひ参加させてください」

笑顔で答える湊。

その目が、一瞬だけ朔也を捉えた。

獲物を見る目。

昨夜と同じ、冷たい光。

朔也は視線を逸らし、手元の書類に集中するふりをした。

心臓がうるさい。

いつ、何をされるのか。

わからないまま、時間だけが過ぎていく。

夕方になって、朔也のスマートフォンが振動した。

知らない番号からのメッセージ。

『今夜21時。B格納庫、整備溝3番。来なければ、明日の朝礼で全員の前で話す』

血の気が引いた。

脅迫だ。

だが、従うしかない。

朔也は震える指で、短く返信した。

『わかった』

21時。

B格納庫は静まり返っていた。

日中は騒がしいこの場所も、夜になれば人氣がなくなる。照明は最低限だけ灯され、巨大な機体が影のように佇んでいる。

整備溝3番。

床に開いた点検用の穴。機体の下部を調べるための、狭い空間。

朔也がそこに着くと、湊はすでに待っていた。

「来たか」

「来なければ、どうなるかわかってる」

「賢いな」

湊が立ち上がる。

作業着姿。手には、安全ベルトとワイヤーロックが握られていた。

「今日は、もう少し本格的に点検する」

「何を」

「昨日は表面だけだっただろ。今日は、内部もチェックする」

意味がわかって、朔也の顔から血の気が引いた。

「それは——」

「溝の中に入れ」

「嫌だ」

「入れ」

声が、低く凄みを帯びた。

「入らなければ、明日、お前の人生は終わる。どっちがいい」

選択肢などなかった。

朔也は唇を噛み、溝へ続くはしごに足をかけた。

整備溝の中は、狭かった。

幅1メートル、深さ2メートルほどの溝。機体の腹部を点検するための空間だ。壁面には工具類がかけられ、上部には作業用の照明が設置されている。

朔也が底に降りると、続いて湊が降りてきた。

二人入ると、もう身動きが取れないほどの狭さ。

逃げ場がない。

「手を上げろ」

「……」

「聞こえなかったか？」

湊の手が、朔也の顎を掴んだ。

強引に顔を上げさせられ、目が合う。

冷たい目。憎しみと、何か別のものが渦巻く目。

「手を上げろ」

従うしかなかった。

朔也は両手を頭上に上げた。湊がその手首を掴み、壁に固定されたパイプに安全ベルトを巻きつける。

カチャリ、と金具が嵌る音。

引っ張っても、外れない。

「これで逃げられないな」

湊が一步下がり、朔也の姿を眺める。

両手を吊り上げられた格好。作業着を着たまま、壁に磔にされている。

「昨日は手袋越しだった」

湊が手袋を外した。

「今日は素手でやる」

うなじを、冷たいものが這い上がった。

素手が、朔也の頬に触れた。

温かい。

昨夜の冷たいニトリル手袋とは違う、人間の体温。

「怯えてるな」

「当たり前だろ」

「そうだな。当たり前だ」

湊の手が、顎から首筋へと滑り降りる。

喉仏を親指で押さえられ、息が詰まりそうになる。

「ここを押せば、意識を失わせることもできる」

「……」

「でも、今日はそうしない。お前には意識を保ったまま、全部味わってもらおう」

手が離れ、作業着のファスナーに移動した。

ジジジ、とジッパーが下りる音。

昨夜と同じ。でも、昨夜より心臓がうるさい。

「頼む」

「何を」

「もう、やめてくれ」

「頼まれても、やめない」

作業着が肩から落ちる。Tシャツを捲り上げられ、裸の上半身が露わになる。

狭い溝の中、照明が朔也の肌を照らした。

「昨日より痩せて見えるな。飯食ってないだろ」

「……」

「答えろ」

「食えなかった」

「罪悪感でか」

沈黙が、肯定の代わりになった。

湊の表情が、一瞬だけ複雑に歪む。

だが、すぐに冷たさを取り戻した。

「点検を始める」

素手が、朔也の胸に触れた。

湊の手は大きく、掌が熱い。整備士らしく、指先には細かい傷やタコがある。

その手が、胸板を撫で上げる。

「ひっ……」

声が漏れた。

昨夜とは感覚が違う。手袋越しではない、直接の接触。肌と肌が触れ合う生々しさ。

「敏感だな」

「触るな」

湊は答えず、手の動きを続けた。

親指が、乳首を掠めた。

「あ……っ」

びくりと身体が跳ねる。

自分でも驚くほど、反応してしまった。

「ここ、感じるのか」

「感じない」

「嘘つくな」

今度は指先で、乳首を摘まれた。

「あっ……！」

声を抑えられない。

こんな場所で声を出したら、上にいる警備員に聞こえるかもしれない。でも、止められない。

「声出すなよ」

「わかって——」

「わかってるなら、我慢しろ」

言いながら、湊は容赦なく刺激を続ける。

左右の乳首を交互に弄られ、捻られ、引っ張られる。

「ん……っ」

思考が霧散していく。

両手を拘束されて、身動きが取れない。逃げることも、払いのけることもできない。ただ与えられる刺激を受け入れるしかない。

「勃ってきてるな」

湊の視線が、朔也の股間に向けられた。

作業ズボン越しでも、膨らみが目立ち始めている。

「違う」

「何が違う。身体は正直だ」

手が胸から離れ、腹部を撫で下りる。

へその周りを指でなぞられ、腰骨のラインを辿られる。

「待っ——」

湊は待たなかった。

ベルトのバックルに手がかかった。

ズボンが下るされると、ボクサーブリーフが露わになった。

濃紺の布地が、すでに持ち上がっている。

「やっぱり勃ってる」

「……」

「昨日と同じだな。こんな状況で興奮するのか」

「興奮なんか」

「してるだろ。ここを見ろ」

湊の手が、布越しに膨らみを握った。

「あっ……！」

「硬いな。先端、濡れてるんじゃないか」

親指が、亀頭の位置を押す。

じわりと、下着に染みが広がっていくのがわかった。

先走り。自分の意志とは関係なく、身体が反応している。

「汚いな。自分の汁で下着汚して」

言葉が突き刺さる。

だが反論できない。

下着の縁に指がかかり、引き下ろされた。

勃起した性器が、狭い溝の中に晒される。

「昨日より硬いな」

「……」

「感じてるんだろ。認めろ」

「認め、ない」

「強情だな」

湊の手が、直接性器を握った。

素手の感触。熱くて、硬くて、でも手のひらは滑らかで。

「あっ……あ……！」

声が抑えられなかった。

昨夜の手袋越しとは比べものにならない刺激。皮膚と皮膚が擦れ合う生々しさが、快感を何倍にも増幅させる。

「声出すなって言っただろ」

「むり……」

「じゃあ、これで」

湊のもう片方の手が、朔也の口に突っ込まれた。

指が二本、舌の上に乗る。

「んんっ……！」

「噛むなよ。噛んだら、本当に痛い目に遭わせる」

脅されて、歯を立てることもできない。

口の中で指を動かされながら、下では性器を扱かれる。

二重の刺激に、視界がちらついた。

湊の手つきは、執拗だった。

ただ上下に扱くだけじゃない。亀頭を掌で包み込んで回すように擦ったり、裏筋を親指でなぞったり、根元をきつく握って血を溜めたり。

まるで、朔也の身体の弱点を探るような手つき。

「ここか」

亀頭の裏側、くびれの部分を集中的に刺激された。

「んんっ……！」

口を塞がれたまま、くぐもった悲鳴が漏れる。

腰が勝手に動く。湊の手に擦りつけようとして、でも拘束されて満足に動けない。

「自分から腰振ってんのか」

昨夜と同じ言葉。

でも、今夜はもっと深く突き刺さる。

認めたくない。認めたくないのに、身体は完全に湊の手に支配されている。

「指、舐めろ」

口の中の指が動く。

舐めろ、と言われても、どうすればいいかわからない。

「舌を使え。俺の指を濡らせ」

仕方なく、舌を動かす。

指の腹を舐め、指の間を舐め、唾液で濡らしていく。

「そうだ。上手いじゃないか」

屈辱的な言葉。

でも、どこかでほんの少しだけ、嬉しいと感じてしまった自分がいた。

何かがおかしい。

壊れ始めている。

「んんっ……」

下では相変わらず性器を弄られ続けている。

先走りがとめどなく溢れ、湊の手を濡らしていく。ぬちゅ、ぬちゅ、と水音が狭い溝に響く。

「そろそろか」

湊が手の動きを速めた。

射精が近い。下腹部がきゅっと締まる感覚。

「ん……！」

イク。イってしまう。

昨夜と同じように、この男の手で。

「まだだ」

手が離れた。

「んっ……！？」

寸止め。

絶頂の直前で止められ、身体が宙ぶらりんのまま取り残される。

「昨日と同じだと思ったか？」

湊が嗤う。

「今日はもっと長くやる」

それから、何度同じことを繰り返されたかわからない。

扱かれて、高められて、限界の直前で止められる。

三度。四度。五度。

「んんっ……！」

涙が溢れていた。

口を塞がれたまま、声にならない悲鳴を上げ続ける。

もう限界だった。頭がどうにかなりそうだった。

「イきたいか」

湊が指を引き抜いた。

唾液の糸が、朔也の唇と湊の指の間に伸びる。

「イきたい、です」

「敬語を使うようになったか」

「お願い、します。イかせて」

「殺人犯が、俺に何か頼める立場か」

言葉が、刃のように刺さる。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

「謝って済むなら——」

「わかってる、わかってるから」

朔也は泣きながら、首を振った。

「何でもする。何でもするから、イかせて」

沈黙が落ちた。

湊の目が、じっと朔也を見つめている。

何を考えているのか、わからない。

「何でもするか」

「する」

「じゃあ、自分の口で言え」

「え」

「『俺のを扱ってください』。そう言え」

朔也の顔が、羞恥で真っ赤に染まった。

「そんな……」

「言わないなら、このまま帰る。お前は一晩中、勃起したまま過ごせ」

脅しではないとわかった。

この男なら、本当にそうする。

「俺の」

声が震える。

「俺の、を」

「聞こえない」

「俺のを、扱いて、ください」

「誰に」

「湊さんに。俺のを、扱いてほしい、です」

「声が小さい」

「俺のを扱いてください……っ！」

叫ぶように言った瞬間、湊の手が再び性器を握った。

「あっ……！」

今度は容赦がなかった。

猛烈な速さで扱かれ、あっという間に絶頂へ追い込まれる。

「イっていいぞ」

「あ、あ……っ……！」

身体が、弓のようにのけぞった。

精液が噴き出す。何度も、何度も。

長い射精だった。溜めに溜められた分、途方もない量が噴き出していく。

白濁した液体が湊の手を汚し、床に飛び散り、自分の腹にも降りかかる。

「は……あ……」

終わった後、朔也は完全に力が抜けていた。

拘束されていなければ、その場に崩れ落ちていただろう。

意識が朦朧とする。

快感と疲労と、得体の知れない感情が混じり合って、何も考えられない。

どれくらい時間が経ったのか。

気がつくと、手首の拘束が外されていた。

「立てるか」

湊の声。

「わから、ない」

「立て」

腕を引っ張られ、無理やり立たされる。

膝がガクガクと震えて、まともに歩けない。

「服を着ろ。自分で」

作業着とズボンを投げ渡される。

朔也は震える手で、なんとか服を身につけた。

精液で汚れた腹部を拭うこともできず、そのまま布地の下に隠す。

「明日も来い」

湊が先にはしごを登り始めた。

「同じ時間、同じ場所」

「毎日、こんなことを——」

「言っただろ。毎日思い知らせてやるって」

足音が遠ざかる。

朔也は一人、溝の底に残された。

自室に帰り着いたのは、23時を過ぎていた。

シャワーを浴び、汚れた服を洗濯機に放り込み、ベッドに倒れ込む。

疲れ切っているのに、眠れなかった。

目を閉じると、湊の顔が浮かぶ。

冷たい目。嘲笑う声。そして。

熱い、素手の感触。

下腹部が、疼いた。

信じられなかった。

あんな屈辱的なことをされて、まだ身体が反応している。

湊の手を、求めている。

「おかしい」

眩いて、朔也は顔を覆った。

「俺、おかしくなってる」

三年間抱えてきた罪悪感が、歪んだ形で身体に表れている。

罰を受けることで、どこかで安堵している自分がいる。

そして、罰を与える人間に。

「考えるな」

頭を振って、無理やり思考を遮断した。

明日も、来いと言われた。

行くしかない。

行って、また。

眠れない夜が、続いていく。

第3話 曝露

三日目の朝、朔也は鏡の前で立ち尽くしていた。

目の下の隈は濃くなり、頬はこけ、唇は乾いている。まるで病人のような顔だった。

二晩連続で、まともに眠れていない。

目を閉じると、湊の顔が浮かぶ。手の感触が蘇る。そして、自分が発した言葉が。

『俺のを扱ってください』

思い出すだけで、顔が熱くなる。

あんなことを言わされて、それでも身体は反応した。いや、言わされたからこそ、余計に興奮してしまった。

自分の中の何かが、確実に壊れ始めている。

それなのに。

出勤しなければ、という義務感だけは消えなかった。

ロッカールームで着替えていると、西野が声をかけてきた。

「柏木さん、大丈夫ですか？ 顔色悪いですよ」

「ああ、ちょっと寝不足で」

「無理しないでくださいね」

心配そうな目。

こいつは何も知らない。自分が三年前に何をしたか。今、何をされているか。

「ありがとう」

それだけ言って、朔也はロッカーを閉めた。

仕事に集中しよう。昼間は普通の整備士として過ごせる。夜になるまでは。

だが、その日は違った。

昼休み、スマートフォンが振動した。

『明日の朝5時半。ロッカールーム』

朔也の心臓が跳ねた。

朝？

夜ではなく？

嫌な予感がした。5時半といえば、早番の出勤時間の直前だ。6時には同僚たちが続々とやってくる。

つまり。

『30分しかない。遅れるなよ』

追加のメッセージ。

やはり、そういうことか。

発見されるリスクを、わざと作っている。

朔也は震える指で返信した。

『わかった』

翌朝、5時20分。

朔也は誰もいないロッカールームに立っていた。

窓の外はまだ薄暗い。蛍光灯の無機質な光が、並んだロッカーを照らしている。

静かだ。

でも、あと40分もすれば、この場所は同僚たちで溢れかえる。

5時25分。足音が聞こえた。

振り返ると、湊が入ってきた。

「時間通りだな」

「……」

「黙ってないで、返事くらいしろ」

「はい」

いつの間にか、敬語が出るようになっていた。

湊が近づいてくる。今日は作業着ではなく、私服だった。黒いパーカーとジーンズ。出勤前に来たのだろう。

「今日は時間がない。手早くやる」

「何を——」

「脱げ」

一言。

朔也は従った。

もう抵抗する気力がない。それに、従わなければどうなるかわかっている。

パーカーを脱ぎ、Tシャツを脱ぎ、ズボンを下ろす。

下着一枚になったところで、湊が言った。

「それも」

「……」

「全部脱げ」

ボクサーブリーフに手をかける。

ためらいながら、ゆっくりと下ろしていく。

まだ何もされていないのに、性器は半勃ちの状態だった。

「もう反応してるのか」

「……」

「身体は正直だな。俺に会えて嬉しいか」

「嬉しくなんか——」

「嘘つけ」

湊の手が、朔也の顎を掴んだ。

「お前の身体は、俺を待ってた。違うか」

否定できなかった。

昨夜、眠れない夜を過ごしながら、どこかで今日を待っていた自分がいた。

おかしい。絶対におかしい。

でも、止められない。

ロッカーに押し付けられた。

冷たい金属が背中に触れ、身体が震える。

「時間がないから、今日は口だけでイかせてやる」

「口？」

「俺の口で、お前のここを咥えてやる」

湊の手が、朔也の性器を軽く握った。

「え……待っ——」

言葉は最後まで続かなかった。

湊が膝をついた。

信じられない光景だった。

復讐者が、加害者の前に跪いている。

「何を——」

「黙ってる」

湊の目が、下から朔也を射抜いた。

冷たい光。獲物を追い詰める肉食獣の目。

「勘違いするなよ」

低い声が響く。

「これは奉仕じゃない。調教だ」

「調教……」

「お前を俺なしじゃ生きられない身体にしてやる」

湊の視線が、一瞬だけ揺れた。

何かを押し殺すような、複雑な光。

でも、すぐに冷たさを取り戻す。

「俺の口でしかイけなくなるまで、何度でも味わわせてやる」

湊の唇が、性器に近づいた。

熱い息がかかる。それだけで、朔也の身体がびくりと反応した。

「敏感だな」

唇が、亀頭に触れた。

「ひっ……」

声が漏れた。

柔らかい。熱い。湿っている。

今まで感じたことのない感触。

「ん……」

湊が口を開き、亀頭を含んだ。

「あっ……！」

声を抑えられなかった。

口の中の熱さ。舌の感触。唾液の滑らかさ。

手で扱かれるのとは全く違う刺激。

「声出すな」

湊が一度口を離して言った。

「あと30分で人が来る。聞こえたらどうなると思う」

「……」

「同僚に見られたいか？ 裸でイカされてるところを」

想像するだけで、恐怖と、認めたくない興奮が混じり合う。

「静かにしてる」

再び、口が性器を飲み込んだ。

湊の口技は、容赦がなかった。

亀頭を舌先で転がし、裏筋を舐め上げ、竿全体を口腔で包み込む。

ずぶ、と根元まで啜えられた時、朔也は膝から崩れ落ちそうになった。

「ん……ふ……」

湊の喉が、亀頭を締め付ける。

深い。熱い。気持ちいい。

頭がどうにかなりそうだった。

「あ……っ」

声を殺そうとしても、漏れてしまう。

唇を噛んで、必死に堪える。

湊の頭が、ゆっくりと前後に動く。

じゅぷ、じゅぷ、と水音が響く。

ロッカールームの静寂の中、その音だけが異様に大きく聞こえた。

「ん……」

湊が鼻で息をしながら、吸い付いてくる。

頬をへこませ、強い吸引力で亀頭を刺激する。

「……！」

腰が勝手に動きそうになる。

湊の口の中に突き込みたい衝動。

でも、そんなことをしたら。

「動くな」

湊が口を離し、睨み上げてきた。

「勝手に腰振るな。俺のペースでやる」

「ごめん、なさい」

「謝るな。気持ち悪い」

再び口が戻ってきた。

今度は、もっとゆっくり。

焦らすように、亀頭だけを舌先で舐め回す。

「あ……っ、もっと……」

「もっと、何だ」

「奥まで……」

「奥まで、何だ。ちゃんと言え」

朔也は羞恥に顔を歪めながら、言葉を絞り出した。

「奥まで、啜えて、ください」

「誰に」

「湊さんに。俺のを、奥まで啜えてほしい、です」

言った瞬間、湊の口が根元まで飲み込んだ。

「あっ……！」

声を殺せなかった。

でも、もう気にする余裕がない。

快感が全身を支配している。

時計を見る余裕はなかった。

ただ、湊の口に貪られ続けている。

舌が竿を這い回り、唇が締め付け、喉奥が亀頭を包む。

朔也の口からは、抑えきれない喘ぎが漏れ続けていた。

「あ……っ、イきそう……」

湊が口を離した。

「まだだ」

「え……」

「まだ10分ある」

10分。

あと10分で、同僚たちが来る。

「もっと焦らしてやる」

湊の舌が、亀頭の先端をちろちろと舐めた。

尿道口に舌先を押し込まれ、びくりと腰が跳ねる。

「ひっ……そこ……！」

「ここが弱いのか」

執拗に同じ場所を刺激される。

尿道の入り口を舐められ、押され、挟られる。

「や……っ、変に、なる……」

「変になれ。壊れろ」

冷たい声。

復讐者の声。

でも、その声すら今は快感を煽る材料になっている。

「あ……あ……」

涙が滲んだ。

気持ちよすぎて、怖くて、恥ずかしくて、何もかもがぐちゃぐちゃになっている。

「そろそろ来るぞ」

湊が立ち上がった。

「え……」

「このままで待つか？」

朔也は真っ青になった。

裸のまま。勃起したまま。涙を浮かべたまま。

あと数分で同僚が来る。

「イかせて……！　お願い……！」

「お願い、何だ」

「お願いします。イかせてください。湊さんの口で、俺を」

言葉が支離滅裂になる。

でも、伝わったらしい。

湊が再び膝をつき、性器を根元まで咥え込んだ。

「あっ……！」

そして、猛烈な速度で頭を動かし始めた。

じゅぽじゅぽじゅぽ。